

まるで多くの退職を待っていたかのように父が倒れ、一週間もしないうちに逝ってしまった。母の時とは違い、世帯主の手続きはそこそこややかじかったのだ。しばらくは市役所に通ったり、仏事の準備やら片付けをしているうちに、気がつくとも半月が過ぎていた。

父の具合がよくならず、朝救急車で病院に運んだ。しばらくしてドクターに呼ばれた。レントゲン写真を前にして、

「助かりません。覚悟しておいてください。」

と言われた。ぼくはまったくそれを想定していなかったのでもうたえた。涙が出てきた。悲しみは、動揺とセットのようだ。やがて静まったら、寂しさか何かと置き換わってしまうのだろう。

父は、四日目の日が変わるころに息を引き取り、その朝には葬儀屋さんが遺体を運びに来た。病院から渡されたのは、小さなプラスチックの手かごに詰められたグズだった。死ぬときの持ち物なんてこんな程度だ。ベッドも酸素マスクも物々しい機械もみんな借り物で、自分の物など入れ歯とか眼鏡ぐらいなもので、ほとんどありはしない。

施設に入っていた母の場合は、父よりは多かったが、それでも段ボールに一つか二つだった。一生の始

末をつけるのに必要な物なんてそれだけなんだ、と思った。

家の中にこれでもかため込まれた物という物は、そのほとんどが一度も箱や袋から出されることのないまま持ち主は逝ってしまった。その始末は、そのままこっちの手に渡った。それは、物を持ちたいなどという気持ちをすっかり萎えさせてしまうのに十分だった。ぼくは、それまで買うのが大好きだった本さえもまったく買わなくなった。

父も母と同じく、捨てるという発想のない人だったので、残した物はどつきりとある。途方に暮れながら、子どもたちがかたづけねばならぬということを決めて一度なりとも想像していますように、と故人を恨みがましく思う。

所有物に囲まれていることが快適だった親世代の反動もあつてか、ぼくたちは借りる手段を発達させ、簡便に購入する方法を次々と手に入れていく。次の世代であるぼくらの子どもたちは、やっぱり親の物との付き合い方にいらついたり、がまんしたりして、またちがつた快適さを求めるのだろう。

前後の世代には申し訳ないけれど、ぼくたちはぼくたちの快適さを求めさせてもらいたい。そうして今日もまた、かたづけに通うのだ。



專業ババ奮闘記 (その2) 45

木幡智恵美

ババルウ星人 (14)

義母の前回の骨折の際は公会堂の車椅子を借りていたが、これから必需品となりそうなので、ケアマネさんをお願いし、レンタルすることにした。デイサービスに通い出してから、玄関にはスロープを、そして、部屋に向かうまでの間には手すりを付けた。上体起こしが出来、高さを調節できるベッドと、廊下のポール(手すりから部屋の戸まで少し距離があるために設置)がレンタルで、それに車椅子が加わった。

最初の頃は夫と二人掛かりでベッドに寝かせたり起こしたりした。ところが、体中どこを触っても痛がるので、少しの移動にもやたら時間がかかる。せつかちの夫にはなかなか難しいことだった。それにトイレや下着の始末、着替えとなると、やはり同性でないと嫌な様子だ。まずベッドの上体を起こし、自分で動かれるまで待ち、下着を交換して車椅子に乗せ、トイレに連れて行く。そして、着替えをして炬燵に備えた椅子に座ってもらう。この一連の動きが、「痛い、痛い」を耳にしながらも、一人でできるようになった。

あと、気がかりなのは、家に居る時、様子を見に行くと、よく炬燵に額をつけた状態、つまり前かがみになっていることだ。整形外科の先生には背筋を伸ばすよう言われている。これでは、いつまで経っても治らないし、違う箇所にも骨折が起きてしまう。夫と相談し、リクライニングチェアを買いに行った。リクライニングにしていると、そのままの状態でも寝ているようになった。たまに前かがみになることはあつたが、頻度はかなり減った。

そうした日々を過ごしながら、週末は玉湯に子守に行った。ドアを開けると、「ババルウ星人だ」と寛大が大声を出し、後から顔を出した実歩まで、「ババルウ星人だ」とはしゃいでいる。寛大は今、ウルトラマンにはまっているのだ。部屋に入ると、宗矢が床に寝ていたので抱っこする。しばらくして、宗矢を乳母車に乗せ、近くの公園まで歩いた。途中、娘と宗矢は授乳のために先に家に帰った。寛大と実歩を遊ばせていると、道路を挟んだ畑にいたご婦人が、「高菜持って帰らん」と声を掛けてくださる。「あそこに新しく建った家の人かね。三人子どもさんがおられるね」と言って、春菊まで分けてくださった。

**30代フリーター** やあ、ジイさん。菅義偉が2030年度の温室効果ガスの削減目標を現在の2013年度比26%から46%に引き上げると表明した（4月23日朝日新聞デジタル）。ホンダはその翌日、エンジン車を2040年までに全廃すると発表した（4月24日朝日新聞朝刊）。世界に遅れを取っていた日本の脱炭素を加速する動きになるだろうか。

**年金生活者** ホンダの発表は世界の主要自動車メーカーの路線に歩調を合わせた転換で、ガソリン使用を捨てないトヨタが世界のトップメーカーの地位を退く前触れになるかもしれない。現在の資本主義は脱炭素を新たな、そして大規模な利潤の源泉にしようとして走り出しているからだ。

**30代** かつて環境保護を経済発展の足かせのように扱っていたのに、たいした変わりようだ。

**年金** 資本主義は利潤をあげるために、常に辺境を必要とする。辺境と開発地を結びつけ、両者の格差を利潤と

に対し、ポスト産業資本主義は、既存の技術体系を辺境とみなし、それとそれを超える新しい技術体系との格差を利潤の源泉とするようになった。

脱炭素はそれをさらに進めて、ガソリン車を生産する既存の技術体系を単に辺境とみなすだけでなく、国家の規制によって人為的に辺境に変容させる。各国の二酸化炭素の削減目標が達成可能な数値かどうか、達成されたとしても地球の温度を目標通り下げられるかどうか、そんなことはおかまいなしに、資本主義は脱炭素路線を突き進むだろう。

**30代** その先に出現するのはどんな社会だ。

**年金** 脱炭素の推進は、モノをつくる産業をいま以上に衰退させ、モノをつくらぬ産業を拡大するだろう。

モノをつくるのに要するエネルギーの大半は化石燃料で占められている。脱炭素の実現にはエネルギー消費を抑えなければならぬ。そのためには、モノづくり産業を減らし、代わりにエ

して搾り取る。商業資本主義は遠隔地という辺境と、開発された近接地とを貿易によって結びつけ、両地域の商品の価格差を利潤として手にした。産業資本主義は農村という辺境と、都市という開発地とを工業化によって結びつけ、両地域の労働力の価格差を利潤の源泉とした。

だが、地球上の辺境は有限だ。今や残り少なくなり、大きな利潤を期待できるほどもない。そこで資本主義が選んだのが、地球上に広がった開発地を逆に辺境として扱うことだ。それが脱炭素への転換にほかならない。資本主義に意志があるとみなす言い方をするならば、そういう理解が成り立つ。

そうなると、資本の時間の流れも逆転する。利潤が生まれるのは資本が現在から未来に向かってその価値を増殖するからだ。それは未開発から開発へと向かうことでもある。これに対して、脱炭素はまだ使える化石燃料の技術を大量に捨てるわけだから、開発から未開発へと向かう側面を有してい

エネルギーをあまり使わない産業、とりわけITを中心とした産業を増やすしかない。それは「産業のソフト化」を通り越した「産業のバーチャル化」と呼ぶことができる。

経済学者の池田信夫は、日本自動車工業会会長の豊田章男（トヨタ自動車社長）が記者会見で「今のまま2050年

る。それは資本が縮小することを意味し、いわばマイナスの利潤を生むことにほかならない。

**30代** 脱炭素は利潤の源泉どころか損害の源泉になる。

**年金** そのマイナス分を埋め合わせ、さらにそれに上乗せしてプラスの利潤を手にするために、資本主義が狙ったのが、各国に脱炭素政策を一齐に採らせ、そのための補助金などを国家財政から支出させることだ。それがいま利潤の原資として期待されている。その期待を生んでいるのは、資本主義の高度化とテクノロジの発達が加速する富の稀少性の縮減だ。

**30代** 国家による介入を市場が嫌う時代もあつたのに。

**年金** 辺境と開発地の逆転は脱炭素がやかましく言われる以前から始まっていた。それがイノベーションを利潤の源泉とするポスト産業資本主義への移行だ。それまでの産業資本主義が、辺境としての農村と、開発地としての都市との格差を利潤の源泉としていたの

カーボンニュートラルが実施されると、国内で自動車は生産できなくなる」と指摘したことをとりあげ、このままだとトヨタは日本から出て行き、その日は日本の製造業が消える日になる、と書いている（「トヨタは日本から出て行くのか」、アゴラ、3月13日）

これまで資本主義は脱炭素、カーボンニュートラルと関係なしに、モノをつくる産業から、つくりぬい産業へとその牽引車を切り替えてきた。その結果、エネルギー消費量が減少に転じていることを池田が指摘している。IT産業の急成長で資本主義の「脱物質化」が加速し、日本では2000年代前半にエネルギー消費はピークアウトした、と（「資本主義の『脱物質化』で人類の未来は明るい」、アゴラ、1月1日）

これから先、さらに脱炭素が進めば、地球の温度は体感されるほど下がることはなくても、世界の産業の様相は目に見えて変わるだろう。それは人びとの生活の利便性が増すことを意味する。

ニュース日記 782  
**中村 礼治**

## 脱炭素に走る資本主義